

質的アプローチとエスノグラフィー

——構築主義からの再考——

糸 林 誉 史*

Qualitative Approach and Ethnography

——Reconsideration from Constructionism——

Yoshifumi Itobayashi

要 旨 今日、「質的」調査研究への関心が高まっている一方で、それをめぐる議論は錯綜している。その検討にあたって、従来の「量的対質的」という単純な対立図式は有効ではない。むしろそれは、どのアプローチもメタ理論的に見て言説/実在（実態）という二分法に依拠していること。また、エスノグラフィーの記述（解釈）という行為の権威や真正さについて、その認識論（epistemology）/存在論（ontology）の次元からの根本的な再検討が必要だからである。「言語論的転回」以降の質的アプローチの展開を見てみると、それは構築主義の立場と同じくする視点が多い。だが、構築主義の基本的な主張である「反本質主義」、「反実在論」、「歴史的・文化的拘束性の強調」は、必然的に相対主義批判を導くことになる。本稿では、まず論理実証主義の破綻とそれを受けて登場した構築主義。次に質的アプローチの多様な展開と混乱。エスノグラフィー批判とポストモダンの転回。そして、存在論的相対主義をめぐる構築主義論争について、それぞれ検討を加える。その上で、フィールドワークにおけるエスノグラフィー実践について、そうした錯綜からの隘路を見出したい。

1 はじめに

今日、「質的」調査研究への関心が高まっている一方で、それをめぐる議論は錯綜している。その検討にあたって、従来の「量的対質的」という単純な対立図式は有効ではない。むしろそれは、どのアプローチもメタ理論的に見て言説/実在（実態）という二分法に依拠していること。またエスノグラフィーの記述（解釈）という行為の権威や真正さについてのリフレクシビティ。また、その認識論（epistemology）/存在論（ontology）の次元からの根本的な再検討が必要だからである。しかし、論理実証主義の原因論（因果モデル）が調査研究のモデルと

なり、その結果、研究対象となる人々の営みの物象化（全体化）につながり、日常言語のカテゴリーと乖離した専門のカテゴリーに依拠して、自然科学における規則性と社会科学における規則性の違いを無視し続けてきたという自然主義アプローチ批判を真摯に受けて、ここを出発点としなければならない。

本稿では、まず論理実証主義の破綻とそれを受けて登場した構築主義。次に質的アプローチの多様な展開と混乱。エスノグラフィー批判とポストモダンの転回。そして、存在論的相対主義をめぐる構築主義論争について、それぞれ検討を加える。その上で、フィールドワークにおけるエスノグラフィー実践について、そうした錯綜からの隘路を見出したい¹⁾。

* 本学講師 文化人類学

2 論理実証主義の破綻と構築主義

構築主義 (constructionism)²⁾は近年、社会問題研究、科学哲学、社会学、精神医学、心理学など、数多くの分野で用いられている。多様な研究が存在するが、その共通する認識とは、「実在物とみなされているある現象は、実は人々による文化に媒介された共同の活動 (joint activities) の構築物である」というものである (Bogen and Lync 1993)。

ここではポスト実証主義 (post-positivism) の立場から、論理実証主義の問題点について仮説演繹法を例に概観し、次にその批判の上に近年台頭してきた構築主義アプローチの目指す方向を述べたい。

まず近代の自然科学の成立には二つの画期があった。それは自然科学が哲学や神学から分化した17世紀の第1次科学革命と、科学研究の社会的な制度化がなされた19世紀の第2次科学革命である。論理実証主義 (logical positivism) は、この第2次科学革命と結びついて成立した。19世紀、実証主義は「観察と実験に基づく科学だけが真の知をあきらかにすることができる」という立場にたって、「世界の魔術からの解放」のために形而上学を批判していった。実証科学は合理化をおすすめ、自然に対する支配にもとづいた社会の近代化、産業化、資本主義化をすすめ、近代合理主義があらわれた。

だが今度は、合理化による疎外が「管理社会化」として問題となった。それを進行させたのは近代合理主義のイデオロギーであり、方法論としては実証科学、システム論などの分析科学であった。それに対して、フランクフルト学派のアドルノとホルクハイマーは、批判理論の立場から人間が客体化されていくこの逆動的な事態を、「啓蒙化 (文明化) がもたらしたあらたな野蛮と神話への回帰」とみなした。つまり、科学が「道具的理性」として管理支配に手をかすイデオロギーの役割を担っている。実証科学を「脱魔術化」すべきであると。これが論理実

証主義批判の背景である³⁾。

これまでの「科学」的アプローチへの批判は次の四つに分類することができる。それは、①論理実証主義批判、②帰納法批判、③決定論批判、④要素還元主義批判であった。次に、論理実証主義批判を仮説演繹法の問題点から、そしてポスト実証主義の台頭を見てみたい。

自然科学における理論構築の手続きは、一般に「仮説演繹法」(hypothetic-deductive method)と呼ばれ、19世紀の半ばにジョン・ハーシェルによって定式化された。ハーシェルは経験的事実獲得の基盤を「(受動的)観察」と「実験(能動的観察)」におき、これらを有機的に結びつける手続きとして仮説演繹法を定式化した。ハーシセルの『自然哲学研究序説』によると、ある現象についての経験的観察の積み重ねから、その現象を説明する「仮説」を考え出すことが仮説演繹法(帰納法)の出発点となる。仮説は通常「AならばBである」とか「BなのはAだからだ」という因果関係についての推定の形をとるが、次の段階ではこの仮説(因果関係)の検証が試みられることになる。ここで仮説の検証に用いられる手続きが「テスト命題」の導出と実験による確認である。因果推定の確認は本来、「Aならば常にB」を確認して完了する。

しかし、一足飛びに「常にB」を確認することは経験的には不可能である。そこで、もとの仮説から経験的に確認可能な命題「XならばY」を演繹し、これを実験的手続き(条件Xを人為的に設定し、結果Yが生じるかどうかを調べる)で確認するという手続きが用いられることになる。ここで「XならばY」が確認されれば、もとの仮説「AならばB」は「支持された」ことになる。複数のテスト命題が実験的に支持されれば、もとの仮説は正しい確率が高いと考えられる。逆にあるテスト命題が実験的に偽とわかれば、もとの仮説は反証されたことになり、修正をしなければならないことになる。こうした手続きを経て、次第に正しい可能性の高い仮説と、そのような仮説からなる理論

を構築していく手続きが仮説演繹法である（野家 2001 : 3-14）。

以上が論理実証主義における仮説演繹法の標準的な方法論である。20世紀の前半にはこの方法論を厳格に適用して、自然科学と社会科学を統合して「統一科学」を作ろうとするウィーン学団（Weiner Kreis）が現れた。しかし、上の記述からも明らかなように理論の完全な検証は不可能である。いくらテスト命題の検証にパスしても、それは「正しい可能性が増す」だけであり、次のテスト命題にはパスしない可能性は常に存在している。その意味で、この方法論を厳格に運用することには無理がある。

20世紀の後半になると、論理実証主義の方法論に対する異議申し立ては、反証主義を唱えたポパーの他にもいくつか見出されるようになった。ポスト実証主義の台頭である。

ハンソンは観察の中には「～として見る」および「ことを見る」という解釈的契機が構造的に組み込まれており、観察とは「理論を背負ってみる」ことにはかならないと主張した。観察が理論によって影響を受けるとすれば、反証主義者が主張するように、その観察によって理論を検証または反証することは循環に陥る。一方、帰納論者が主張するように観察から理論が形成されるとしても、その最初の観察が完全に純粹・中立ではあり得ないことを指摘する（Hanson 1986[1958] : 41）。ここに「観察の理論負荷性」の問題は、論理実証主義、反証主義の双方に対して疑問をつきつけることとなった。

さらにクワインは「経験主義のふたつのドグマ」において、「反証」の不完全性についての指摘を行った。実際に科学者が立てる仮説は単一の因果関係についての主張ではなく、いくつかの因果関係の組み合わせからなる「仮説群」であることが多い。これらは、「主要仮説」と「補助仮説」に大別できるが、もし実証的な研究によって主要仮説と補助仮説が反証されても、その結果がどちらの仮説を否定しているかは自明ではない。そこには仮説修正についての自由度が存在する。通常は補助仮説を否定して

主要仮説の生き残りが図られることが多いが、こうした修正でしのげなくなると、主要仮説が否定されパラダイム転換が起こると考えられる（Quine 1992[1953] : 63）。仮説を「仮説群」ととらえ、仮説群と現実世界の境界で生じる摩擦（反証）が仮説群の内部構造の変動をもたらすとするクワインの視点は、「実証」の果たす役割をよりの確に捉えなおしたものといえよう。

社会科学分野においても、調査研究の基礎づけ主義をなした素朴実在論、すなわち世界は観察者とは独立に「客観的現実」（the world “out there”）として存在すると信じられ、測定可能な事象を緻密に分析していくことによって理論は「真理」にいたる道を提供するとする考えは、退けられていった。

このようなポスト実証主義の台頭に呼応して、「客観」の姿をありのまま「鏡」のように映すと考えられてきた概念や理論の歴史性・恣意性を指摘し、その反省知のうえに社会理論を構築しようとするのが、社会構築主義、批判理論、ポスト構造主義、フェミニズム理論等に代表される構築主義アプローチである。

構築主義アプローチが問題とするのは、人々の相互行為によって編み上げられた社会的な事柄や出来事は、直接・間接に言語に媒介されたものであり、そのときの言語は研究者が準備した「客観的」な言葉の定義を踏まえたものではないという点にある。逆に、日常言語の使用の実践が、社会的な事柄や出来事といった実態を構成する。したがって、科学的で客観的な定義を出発点におく調査研究は、量的であれ質的アプローチであれ、構築主義批判の対象となった。

社会科学分野における構築主義の起源はフォーコーの権力論や現象学的社会学やなど様々である。日本で採り上げられるようになったのは社会学における社会問題論の領域からであった。初めて紹介されたのはバーガーとルックマンの著書『日常世界の構成』（1977 [1966]）を通じて、「社会構成主義」として紹介された。1980年代になってから社会問題論やラベリング理論の系譜の中で、ラベリング理論を批判的に克服

するものとしてスペクターとキツセの『社会問題の構築』(1977=1990)によって提唱されたのが、今日の台頭にとって節目となった。90年代には日本に本格的に浸透してきたポストモダンニズム理論の立場から、従来の社会的資源の不平等や制度的抑圧にかわって、言語、言説、物語による抑圧と支配の構造が注目され、そこからの解放が研究の新たな目標として設定されるに至った⁴⁾。それは調査研究の目的が実証から実践へと転換したことを意味する。アメリカでは、一方で厳しい方法論上の「構築主義論争」を経験しながらも、注目に値する量の経験的研究の蓄積を見た。また日本でも輸入期から定着期に入り、中河伸俊『社会問題の社会学』(1999)および上野千鶴子編『構築主義とは何か』(2001)の刊行を経て、構築主義のパスベクティブの前提命題を例証するだけで意義があった時期は終わったといえる。

3 質的アプローチの展開

質的アプローチは、人類学およびシカゴ学派の古典的なエスノグラフィー (ethnography) の時代から社会調査の重要な位置を占めてきたが、その基調となった方法論上の立場は自然主義 (naturalism) と呼ばれるものであった。この立場に連なるのは日本で広く読まれている佐藤郁哉の入門書『フィールドワーク』(1992)であり、またロフランドの『社会的状況の分析』(1995)である。

確かに会話資料の分析やビデオ分析、コンピュータの利用、映像や音楽の分析、さらにゲームやアニメの分析など、質的アプローチの発展とともに対象と技法の選択しも増加した。しかし、エスノグラフィーの「表象の危機」と呼ばれる事態を通過した現在、古典的エスノグラフィーの時代のようにその認識論的な問題点について無邪気ではいられない。それは、質的調査者が、研究対象となる社会的世界を直接観察して、その結果として得られた「ありのまま」の事実を報告するという素朴な理解に対して、様

々な立場から批判や異議申し立てが行われてきたからである (Marcus and Fisher 1986)。

その主張するところは、質的研究の成果は「単なる報告」ではなく、調査者が自らの視点や各種のレトリックに依拠して紡ぎ出した言語表象あるいは「物語」ではないのか。したがって質的調査の記述の「真実性」は決して科学的でも客観的なものでもなくなる。さらに、調べる・書く・著述を流通させるといった調査者の表象活動は、調査者の立場性や研究の政治的状況を不問にして営むことはできない。なぜならその中では、支配-被支配関係や不平等を再生産する表象の権力 (太田 1998: 191) が作動しているからである。

だがこの立場性の議論で問題となるのは、それが「われわれ/かれら」という、経験的な吟味に先立つカテゴリーの二分法を所与としていることである。エスノグラファー/調査対象の人々であれ、抑圧者/被抑圧者であれ、二分法の固定化は逆に、多様で入り組んだ人々の活動とそれを組織化する言説実践の具体的な吟味の妨げにしかならないのではないか。

このような質的アプローチ批判が、前述の実証主義対ポスト実証主義の対立軸と絡みあい質的調査のパラダイムの多様な並立状況を生んだ。デンジンとリンカーンの『質的調査ハンドブック』(2000)によると、それは七種類の「解釈パラダイム」の選択肢があるという。第一に、「実証主義/ポスト実証主義(自然主義)」。第二に、「構成主義」。第三に、「フェミニスト」。第四に、「エスニック」。第五に、「マルクス主義」。第六に、「カルチュラル・スタディーズ」。第七に、「クィア理論」である (Denzin and Lincoln 2000: 1-28)。これら各パラダイムの前提となる存在論・認識論・方法論およびそれにもとづく語りのスタイルはきわめて多様であり、すべてについて共通項を見出すことは難しい。

しかしここで「質的調査と量的調査は相補的なもの」とあるという想定、さらにデータの種類の違いとしての対象の「深み」を捕らえる質

的調査と対象を網羅する量的調査といった従来の対立軸をここで持ち出すことは生産的ではない。なぜなら構築主義の立場からすれば、それ以前に吟味されなければいけない研究対象を何らかの形で指示するカテゴリーの扱われ方がきわめて重要性を持つからである。これは典型的な計量調査の「因果モデル」における変数（カテゴリー）の構成のされ方だけでなく、質的調査による「家族」、「民族」、「エスニシティ」、「ジェンダー」、さらに「文化」、「社会」といった、調査以前にあらかじめ想定された「概念」の扱い方も重要な吟味の対象となる。

グブリアムとホルスタインは『質的方法の新言語』（1997）において、これまでの質的アプローチの「方法の言語」を、第一に、自然主義。第二に、エスノメソドロジー。第三に、感情主義。第四に、ポストモダニズムの四つに区分して、それぞれの前提や特徴を論じている（Gubrium and Holstein 1997 : Part I）。このうち自然主義は、従来の人類学や社会学の質的探求の主流であった論理実証主義的なアプローチであり、ほかの三つはそれに対する批判として登場してきたものである。ここでグブリアムらのアプローチの整理をまとめてみたい。

まず、第一の自然主義は、質的調査について素朴な現地主義の立場を取る。この場合、社会的現実とは「現地に行って、そこの人々の中に入って観察すれば発見できる」というのが、大前提となる。社会的な現実とは、「自然な」環境の中に実在すると想定、および人々の行為や活動を「歪めることなく」正確に記述することが、エスノグラファーの役割となる。そうした典型としてホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』（1943）、アンダーソンの『街角の場所』（1976）を挙げるが、その中では特定の地理的な場所が著述の表題となり、その場所での参与観察（participant observation）を通じて「彼らの世界」の中に入ることで、またその活動の一部となってキー・インフォーマントを獲得することが、調査の基本的な手順とされる。著述の記述はキー・インフォーマントを中心に行

われ、他の人物は脇役に回される。さらに記述では、ネイティブ（当事者）の証言は、基本的に額面どおりに受けとめられる。この立場における調査のポイントは、第一に、事前の想定を最小とすること。第二に、人々とともに過ごす（参与観察）こと。第三に、観察された現実を忠実に再構成すること、の三つが重要となる。語りとスタイルとしては、実在論的物語が採用される。ここで問題となるのは「社会的現実とはフィールドに出れば、そこ（out there）にある」という素朴実在論的な想定である。

第二のエスノメソドロジーでは、自然主義の「そこ」にあるという想定から離脱しつつも、「人々は、それについて観察し、報告することが可能な、日常生活の秩序だった言説および相互行為的な能力を備えている」ということが大前提となる。エスノメソドロジストは、人々の相互行為の成果を研究対象とする自然主義とは異なり、人々がそうした成果を生み出す方法を研究の対象とする。ここでは、どのような「現実」が「ある」か、つまり what から、どのようにして「現実」が産出されているか、つまり how へと調査のガイドラインが変更される。エスノメソドロジーでは、調査のフィールドは特定の地理的な場所に縛られないし、調査にあたり、特定の社会的世界の「内側」へ入ることは要請されない。社会的現実を構成するような相互行為が行われているあらゆる場所が調査のフィールドとなる。分析の焦点となるのは、場面を構成する出来事としての会話と交互行為である。

第三の感情主義（emotionalism）では、「生きられた経験」主義とも言える立場を主張する。個人の経験の「内的」領域の深みに目を向けて、調査者と著述の読者が経験の真実を感じることを目標とする。この立場では、エスノメソドロジー的な how の冷たい無関心が分析の対象外としたものを復活させようという意図がある。このアプローチでは、調査者の感情的な没入が推奨される。自然主義的な著述のニュートラルな語りに対して、感情主義では体系的な

内省から導かれた「感情的なフィールドノート」が書かれ、著述では「内的経験」をドラマ化して、「感情を再演」する「告白体の物語」(Van Maanen 1988)あるいは「ナラティブ・アプローチ」のスタイルが採用される。

第四のポストモダニズムでは、リオタールの言う「メタナラティブへの疑い深さ」が特徴となる。具体的には方法論的な公準そのものが一種のレトリックとしてみなされる。サンプリングと統計的検定の理論であれ、経験的な探求にはそれに沿った手順のプログラムがあり、その前提とする存在論的なルールに疑問を投げかける。社会調査は、経験的な「事実」と繋留されて真実としての特権的立場を与えられるが、実はそれは一種の文学的なレトリックの産物ではないのか。たとえばエスノグラファーの著述は、調査者自らの視点や構成的な視点に沿って書かれた「エスノグラファーの物語」、つまり一種の「フィクション」(Clifford and Marcus 1986)ではないかという指摘である。

ポストモダニズムの認識は、エスノグラファーは経験への繋留をはずされて、単なる「表象」とみなす。質的調査は、研究者の表象実践の研究となり、自然主義的な what も、経験的な how も成り立たなくなる。調査のフィールドは、実在の場所ではなく、「特定の道徳的空間上のレトリックの錨」に過ぎない。また感情主義のこだわる経験の深さもまた自然なものではなく、ロマン化された表象に過ぎない。リアルなものは根こそぎに消去されて、残るのはイメージと純粋な表象の世界だけとなる。こうした「否定的」ポストモダニストに対して、「肯定的」ポストモダニストもいる。たとえばデンジンは、階級や人種、ジェンダーを捨てて、ニヒリズムに至るのは質的探索にとって有害だとする。だがこの立場はその破壊性こそが有力な理論的な貢献なのであり、「肯定的」な折衷主義では、なぜ階級や人種、ジェンダーといったカテゴリーだけをあらかじめ「単なる表象」以上の地位に特権化し、解放的な実践を推し進めるのか、という疑問に答えることができない。

さらにポストモダニズムの立場では、「リフレキシビティ (reflexivity)」が問われている。自らの記述はどのような暗黙の想定や表象実践に依拠して構成されるのか、またそうした記述は、どのような仕組みを通じて、特権的な事実・真実・学問として流通するのか。

それに対する答えの一つとしては、「エスノグラファーのエスノグラファー」(Van Maanen 1988)などの実験的エスノグラファーがある。そこでは、テキストを「複数の声」によって構成する試みや、きれいに整理されていないテキストの提示、ナラティブに対応するために詩形式での記述を試みるなどの実践がある。

以上のようにグリアムとホルスタインは四つの「方法の言語」を総合して「新しい質的方法の言語」を作ることを提案した。しかし、一つの著述のなかで、両立しない前提を持つ複数の方法論を併用することは、その知見をあいまいにし安易な折衷をもたらすものである。ここで指摘できるのは、自然主義の問題点は、人々の言語実践に伴う意味構成過程を考慮しない「客観主義」のみであることにある。また、感情主義では、「経験の真正さ」を前提とする点が、経験の物象化となっている。さらに、ポストモダニズムでは、逆に経験の真正さを認めず、「表象/実在」の対応関係をまったく否定する。確かに研究対象となった表象の特権化を批判することは、自然主義から脱却する上で一定の意義があったが、ポストモダニズムを強引に進めると、人々の実践的な活動から離れた「純粋な表象」のみの研究になってしまう点に最大の問題がある。

4 エスノグラファーの作法

1980年代以降の人類学を特徴づけてきたのは「表象の危機」と「エスノグラファー」の二つのキーワードであった。このいわゆる「ポストモダンの転回」は、ポストコロニアル批判やポストモダン理論の展開にもなって、それまで「未開の文化の護民官、未見の民族の代弁者、

誤解されてきた習俗の理解者」であった人類学者の役割に大きな見直しが行われた結果であった。そこには、かつて植民地宗主国の人類学者に一方的に表象されるままの存在であった人々が、世界システムの構造転換にともない、自らの手による表象を求めて行動するようになり、そのことが既存の人類学の調査研究のあり方を根底から揺さぶることになった、と一般に言われる。しかし、こうした議論においては「自己（調査者）」と「他者（研究対象）」の関係の非対称性ばかりに批判が集中した。ここでは80年代以降の人類学におけるエスノグラフィーの展開を見てみたい。

一般に、人類学のフィールドワークにおける質的アプローチの代表は、エスノグラフィーである。エスノグラフィーには次の三つの意味がある。①「民族誌」、②「民族誌的アプローチ」、③「民族誌学」である。一般には、①と②を重ねた意味で使われる。

このような古典的なエスノグラフィーは、「社会全体」を描き出そうとしたマクロエスノグラフィーの伝統に沿ったものであった。方法論として「参与観察」が用いられた。人類学者のエスノグラフィーにおいては、まず、フィールドワークを行い、フィールドノートを作成する。次に、フィールドノートの文字情報を分析し、データに名指した仮説を生成する。そして、仮説の既存の理論の中での位置づけを考察し、自分がフィールドで発見したこと、その解釈と論理的意味を他者に伝えることがその手順とされる。

ところで質的アプローチとしてエスノグラフィーをみた場合、エスノグラフィーには次の四つのカテゴリーがあった。①「科学的エスノグラフィー」、②「批判的エスノグラフィー」、③「古典的エスノグラフィー」、④「実験的エスノグラフィー」である。

第一の科学的エスノグラフィーでは、言明や知見の客観性を何より重視し、実証主義的社会科学の立場を持ったエスノグラフィーである。代表はグラウンデッド・セオリー（データ対話

型理論）を主張するグレイザーとストラウスであり、網羅的なフィールドノーツの作成と研究グループ内でのフィールドノーツの共有によってデータの信頼性と妥当性の向上を目指し、「論理的サンプリング」、「カテゴリーとその諸特性」、「絶えざる比較法」、「理論的飽和」といった「量的方法」の構成要素とは異なった概念装置を提示しつつも、構造化を特徴とする実証主義的アプローチを示した（Glaser and Strauss 1967=1996）。

第二の批判的エスノグラフィーでは、実証主義的研究の限界への批判から出発し、1960年代終わりから70年代初めにかけて、教育・医療などの臨床的なフィールドにおいて登場してきた。特定場面における意味の交渉に着目するシンボリック相互作用論、エスノメソドロジーなどの、ミクロな文脈における社会的相互作用のありように着目する解釈的な方法論に基礎をおいたものである（Carspecken 1996）。

第三の古典的エスノグラフィーでは、参与観察にもとづく人類学の著述が代表とされる。特定の文化の全体性を洞察に満ちた叙述によって提示しようという指向性を持つ。確かに、優れた洞察力を持つ調査者の説得力ある記述は、この分野での実践の大いなる魅力であった。だが、「全体論（holism）」の持つ認識論上の問題や前述のポストモダン批判を避けることができない。

第四の実験的エスノグラフィーでは、ポスト実証主義の議論、および1980年代以降の人類学の転回を受けて誕生した様々な実験的試みを指す。そこでは「文化の多様性を描き出すこと」という記述への配慮と人類学の営みに見られてきた調査者と被調査者に非対称な関係が焦点となっている。自然主義の立場から書かれたエスノグラフィーでは、語り手はテキスト自体から姿を消すが、この実験的エスノグラフィーでは、調査者がどのようにフィールドワークを行ったかという点が主題化される。調査地における日常、住民との交流や対立、調査者自身の動揺や偏見などが披露される。この流れとして、

調査地の人々との対話を中心に置く「対話法 (dialogism)」エスノグラフィーや住民自身の多用な声をテキストに反映させる「多声法 (polyphony)」エスノグラフィーなどの手法が試みられている⁵⁾。

ここで人類学におけるエスノグラフィー批判について次の二つに整理しておく。

第一は、「エスノグラフィーを行うことは可能なのか」という問題であった。1980年代にはマリノフスキーやミードが確立した古典的エスノグラフィーへの再検討が行われた。67年に刊行された『マリノフスキー日記』のなかの「準備完了。薄紅色に照り映える、灰色の小屋。写真を撮る。(この島を) 所有しているような感じを抱く。それらを記述し創造するのは、この私なのだ」といった彼の独白に対して、ギアツは「カメレオンのフィールドワーカーの神話は、それを創造するにおそらくもっとも力のあった人物自らの手によって、完膚なきまで破壊されたのである」とまで述べた(ギアツ 1999: 98)。それに続く83年のフリーマンの『マーガレット・ミードとサモア』では、ミードとは正反対の調査報告・解釈を提示して、有名な「サモア論争」を引き起こした(1995: 22-58)。さらに、86年のクリフォードとマーカスによる『文化を書く』のもたらしたショックは、多くの人類学者にエスノグラフィー=フィクションであるという認識を広めることになった。この著書の中でクリフォードは、「書く」ことの、①文脈依存性、②レトリック性、③制度性、④包括性、⑤政治性、⑥歴史性の六つについて疑問を提示した。また、文化が自然科学的な「対象」ではないこと、同時に明確に解釈できるシンボルや意味の統一的な集成ではないことを指摘した(Clifford 1988: 21-54)。日本においては、関本照夫の論考(1988)が嚆矢としてあげられる。

このようなエスノグラフィー批判が興隆した背景には、文化を閉鎖的な「系」と見做しうるような機能主義的なアプローチの完全な失墜とそれを受けて登場した構築主義的な本質主義批

判の展開があった。

ここで参与観察という作業を調査者と研究対象との関係から見てみると、参与は内部の行為であり、観察は外部の行為である。その出発点以来、古典的エスノグラフィーは対象を自らと区別しながら中に入り込む認識論的相対主義(epistemological relativism)の持つ「参与観察のパラドックス」を抱えていた(関本 1988: 263-289)。「客観主義」の裏返しとしての「当事者主義」の持つ妥当性が疑われたのであった。また同時に、研究者という「自己」が「他者(かれら)」を調査対象とする点は政治性を帯びていた。

第二は、いわゆる転回以降、「エスノグラフィーは、どのような方法でなしとげられるべきか」という問題が焦点となった。それはエスノグラフィーの具体的な記述の中で慣例的に用いられてきた「テキスト」への批判であり、その「ジャンル」、「レトリック」を問題視した。またそれは文化を「書く」という行為への批判でもあった。たとえば、「民族誌的現在(ethnographic present)」と呼ばれる独特の語りは、対象を歴史的コンテクストから切り離し、超時間的存在として凍りつかせてしまう(Fabian 1983: 80-87)。また間接話法の多用は、研究者が対象となる人々になり代わって全知の神の立場から語ることを可能にした(Clifford 1988: 47-48)。

エスノグラフィーは、場を共有するなかから何者かの認識を取り上げ発話していこうとする実践であり、その背後には絶えざる権力的な葛藤を伴うリアリティの分裂がある。人類学者は、支配的言説と対抗的言説あるいは交渉的言説のいずれにも注目しながら、自/他の二項対立を超えて、ネゴシエーションのなかから記述を進めなければならない。

5 構築主義論争

エスノグラフィーにおける「ポストモダニック転回」以後の「表象/実在」の問題、そして自/

他区分線引きにしても、また「構築主義」の社会問題研究においても、なぜそのような問題（対象）がとくに問題視されるのか、そしてその分析（解釈）枠はいかにして妥当なものか判定できるのか、といった疑問が浮上してくる。そこで、ここでは主にウールガーとポーラッチ（Woolgar and Pawluch 1985）、中河（1999）などを手がかりに、構築主義論争について簡単に紹介し、その問題点を検討したい。

スペクターとキツセの共著『社会問題の構築』によって提案された構築主義および彼らの社会問題論はもっぱら人びとの社会的定義づけ過程に焦点を定めたものであり、客観的条件によって社会問題を定義するという従来の社会問題の社会学や社会病理学では、「社会問題」という概念を何らかの「社会の状態（social condition）」とし、それを研究対象としてきた。それに対し、構築主義は社会問題を「活動（activities）」として捉える。その中心的主張は、社会問題を「なんらかの想定された状態について苦情を述べ、クレームを申し立てる個人やグループの活動である」と定義するところにある（Spector and Kitsuse 1977 : 75）。

中河の整理によると、社会構築主義では、何が社会問題であるかを研究者自身が恣意的に決めない。ある人びとがある状態について「問題である」とクレームを申し立てた段階で、それは研究対象になるとする。つまり、その「問題」が「実在」するかどうかわからず、クレーム申し立てという言語行為は観察可能だからである。だれがクレーム申し立てをするかについても限定しない。キーワードは「クレーム申し立て活動」と「社会問題のカテゴリー」だという（中河 1999 : 23-31）。

それに対して科学社会学者のウールガーとポーラッチは、構築主義の「定義的パースペクティブ」をとる研究にはある共通の構造があるとして批判を展開した。それは、構築主義の研究者は研究をすすめるうえで「選択的相対主義（selective relativism）」を暗黙のうちに行っているというもので、彼らはそのことを「存在論

的ゲリマンダリング（ontological gerrymandering）」と呼んだ。「クレーム申し立て活動」とは、ある「想定された状態」に対する定義づけ活動であった。それならば、まず複数の異なる「定義」がなければ、構築主義の議論の余地はない、というのが彼らの見解である。つまり、時代や地域や集団等々によって定義に差異がなければ論ずることはないということになる。その上で、構築主義の典型的な議論の進め方は次のように批判される。分析者は、①ある状態や行動を同定した上で、②その状態や行動に対する複数の定義やクレームを同定する。③状態の恒常性と比べ、定義の可変性が強調される。こうした説明の図式は、「社会の状態」それ自体は変化していないという仮定の上にあるというのが彼らの批判の要である。つまり、典型的な議論の構成はこうなる。「Xという状態は長く続いていたにもかかわらず、Yという定義はごく最近のものである」と。そうすると、Yという定義の変化ないし出現は、Xという状態それ自体に還元して説明できない。したがって、定義の変化は、社会問題とされる状態それ自体ではなく、クレーム申し立て活動をめぐる状況から説明されることになる。

以上のようにウールガーとポーラッチは、フォールの「児童虐待の『発見』」という論文を例に、構築主義研究に内在する「存在論的ゲリマンダリング」をえぐり出してみせた。裁判記録などの公式統計では、「子どもへの暴行」が増加しているという証拠はない。それにもかかわらず「児童虐待」がアメリカでは大きな社会問題になってきている。親による体罰などの「子どもへの暴行」それ自体は古くからあったことで、とりたてて「問題」ではなかった。それが近年大きく社会問題化した背景には、ある「社会的力」が働き、定義が変化したのだというのがフォールの説明の仕方である。

この説明の構図の弱点は、「子どもへの暴行それ自体は昔からあったことで、その現象自体に変化はない」という暗黙の仮定である。第一に、そうした事実が「存在」し、そして第二に

それは通時的に変化していないという前提がなければ、彼の議論はそもそも成り立たない。だが、当該の**社会**の状態ないし行動が増加しているという根拠がないのと同様に、変化していないということも証明できないのである。このことは、フォール以外にも、構築主義の多くの事例研究に当てはまる批判であった。構築主義では、「**社会**の状態の真偽については非決定の立場をとる」とし、「想定された状態が存在するか否かには関心を払わない」と宣言しておきながら、実は議論を進める上で「状態は不変である」という仮定を置かざるをえないということ。つまり、構築主義者は分析をすすめるうえで、自ら定めたルールを破っているということになる。定義については相対化し、**社会**の状態については実在論を選択的に導入している。このことを彼らは「選択的相対主義」として批判したのであった。

存在論的ゲリマンダリング批判を受けて、構築主義に内在していた「コンテキスト派」と「厳格派」というふたつの関心のあり方が明らかになった。前者の代表的論者がベスト (Best, J.)、後者をイバラとキツセと見なすのが一般的であろう。だがコンテキスト派と厳格派の両者には共通点があった。それは、「**社会**問題のカテゴリー」の言語的な構成に焦点を当てたところである。ベストはクレイムそれ自体よりもむしろ、その出現の「**社会的・文化的**コンテキスト」に関心を寄せるが、その根拠はあくまでもクレイムの論理的構成に置かれている。一方、厳格派の提唱者とされるイバラとキツセの「レトリックのイディオム」というアプローチもまた、クレイムの言語的表現に焦点を当てたものである。彼らの言う「対抗クレイム」への着目は、クレイムの「受け手」の側のリアクションに光をあてたという意味で大きな意義があったと考える。

次に日本での構築主義論争を振り返ってみると、議論は「**社会**問題のカテゴリー」に集中した (徳岡 1997)。中河はウールガーとポーラッチの批判を「なにが『問題』とされるかについ

て、あらかじめ研究者の抱いている信念が密輸入されている」こと。そのことはつまり「あらかじめ客観的状态が想定され、それが参照されている」という批判として整理したうえで、前者と後者は別物だとする。

中河は前者に対しては、あらゆる記述は研究者の関心に基づいて行われる以上、研究者の関心が入り込むのは当然であって、そこから自由な、中立な記述などあり得ない、として一蹴し、後者に関しては、注意深くすれば避けることができる、と反論して、後者の批判のみに有効性を認めている (1999 : 276-279)。しかし、ここでの中河の前者への反論は十分納得のいくものとは思われない。たしかに研究者は自分の問題関心に沿って研究を行うが、それが研究に値する妥当な「問題」と見なされるかどうかはまた別のことであり、そこにはなんらかの権力にもとづく恣意性が持ち込まれている可能性がある。だとすれば、ある問題が選択されて、別の問題が選択されないことにはいかなる理由があるのか。これについて中河には明確な答えが用意されていない。

なお後者については、イバラとキツセの「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素」論文がある。彼らは批判にこたえて、従来「想定された状態」と呼んでいたものを「状態のカテゴリー」に置き換えることを対案として提案する。これは、いわゆる客観的な**社会**の状態についての言及を切り捨てて、人びとがその状況に対して駆使するシンボルや言説分析に研究対象をしぼるという戦略である。彼らは、「**社会**構築主義は、シンボルを用いて境界設定された**社会的**現実をメンバーが知覚し、記述し、評価し、それについての行動をする際に拠り所にする固有のやり方を研究するのである。」と主張した (Ibarra and Kitsuse 2000[1993] : 61)。

しかし、結局のところ「存在論的ゲリマンダリング」論争とは、言説を分析する言説がいかにして特権的 (客観的) たりうるかに関する議論だったことになり、問題の設定自体が構築主義の前提と矛盾するものだった。言説に関する

言説も必ずなんらかの現実を構成し、なんらかの権力作用を帯び、またそれがひとつの言説である限り、いつ言説分析の対象に俎上されてもおかしくないと考えるべきであろう。

6 相対主義批判を超えて

バーは、『社会的構築主義への招待』の序章において、社会的構築主義がそれまでのアプローチと異なる点として①反本質主義、②反実在論、③知識の歴史のおよび文化的な特殊性、④思考の前提条件としての言語を挙げている。だが、これらはみなバトラーなどのジェンダーの社会的構築性を強調するフェミニスト理論や、ポスト構造主義者の議論とも共通する考え方である。そこで、以下では「構築主義」にみられる「表象/実在(実態)」の問題について、分析哲学の「相対主義」批判から検討を加えたい。

著書のなかでバーは、「人が言語に先立つことはありえないのであって、というのもそもそも人を生み出すものが言語にはかならないから」であり、「すなわち言語は、すでに存在する社会的実在を反映するのではなく、われわれにとってのその実在を構成し、それに枠組をもたらすのである。われわれにとっての概念的空間を切り分けるものは、言語の構造であり、能記と所記の体系であり、それらの差異に基づいて構成されるそれらの意味なのである」と考える。さらに「われわれのもつ、連続性と統一性の主観的感情は、それ自体が、他の人びととの言語に基づく社会的相互作用の結果と見ることができるし、現実的というよりは錯覚的な結果なのである。」とする(Burr 1997 [1995]: 52-59)。つまり言語体系がほかの何よりも先立って存在し、「事実」はその体系の網の目における他との関係において決まる、というソシュール的な発想がその根底にある。そしてその発想は、ついには「言語の外には、どんな本質的、独立的存在をもつものも存在しない。存在するのは、言説だけなのだ。」(同上: 89)という、

言説決定論的な、しかし構築主義の核心をなす考えに至る。ここで疑問なのは、はたしてそのように固定的な概念枠組(言語体系)なるものが存在するのかということである。バーは、英語圏には「シーブ」と「マトン」の区別があるがフランス語圏には「ムートン」の語しかないという例を挙げて、「われわれが「シーブ」と「マトン」の概念の間にどのような差異を見ようとも、それはフランス語を話す人には単に存在しないのだ」(同上: 58)と述べているが、ここで方言を例に挙げるまでもなく、個人人の語彙量や性別、年齢その他によって、その人その人にとっての「言語」は同じ言語圏に住む人であっても異なりうる。つまり、言語はここで想定されるように単一で固定的なものとして宙に浮いているわけではないし、またそれは日々変容していくものなのである。それならば、「存在するのは言語だけである」という以前に、「言語が存在する」という言明そのものが疑わしくなる。

論理実証主義批判、構築主義の台頭、および古典的エスノグラフィー批判の展開に共通する時代的背景としては、20世紀初頭にソシュールが提示し、のちの1960年代に「言語論的転回(linguistic turn)」と呼ばれる人文・社会科学上の「パラダイム」転換があった(Rorty 1993 [1979])。20世紀の哲学上の重要な転回のひとつは、言語の発見であった。たとえば、論理学と数学におけるフレイゲやラッセル、ヴィトゲンシュタイン、近代的な記号論をはじめたソシュールとパース、言語行為論のオースティンなどである。「意識分析(反省)」から「言語分析」へという方法論上の展開によって、「哲学的問題は、言語を改良すること(理想言語学派)によって、もしくはわれわれが現在使っている言語をよりよく理解すること(日常言語学派)によって解決される」。思想家や哲学者が問うものはもはやアイデアや本質ではない。観念や表象でもない。そもそもそれらを含めてあらゆるものが問題とされ形をなす表現領域、つまり言語である。言語が自然的なものではなく、

人為的で恣意的な差異の体系であること、言語が言語外的な指示対象物を意味したり伝達する道具ではなく、意味の産出をつうじて現実を構成する当の実践そのものであること、言語が心理的・内在的なものではなく、社会的・外在的なものであることがその主張であった。しかしここで注意しておかなければならないのは、この言語論的パラダイムによる諸研究は、表象/実在の二分法の後半を消去する試みであり、言語（テキスト）とそれを語る主体や調査対象者との関係を切り離してしまうものだったという点である。

また、構築主義の基本的な主張である「反本質主義」、「反実在論」、「歴史的・文化的拘束性の強調」は、必然的に相対主義批判を導くことになる。パーは、「ある言説が「真理」の刻印を受け、他のそれが受けないのは、相対的に権力のある集団のためなのである」（同上：85）とする。この言明には、「では、真理が存在せず、全ては言説のせめぎ合いだとするなら、いかなる意味であなたの主張は正しいといえるのか」というアメリカの分析哲学が問題にしたような根本的な問題が内在している。それは、デイヴィッドソンらが問題にした「相対主義」の問題である。

まず、相対主義は、次の三つに分類される。①認識的相対主義（真偽に関わる相対主義）、②道徳的相対主義（倫理的相対主義）、③審美的相対主義（美醜に関わる相対主義）である。一般には、真偽や善悪などは、それを捉える「枠組み」や「観点」に応じて変わる相対的なものであり、唯一絶対の真理や正しさはないと主張する。例えば、何を正義とするかは「文化」によって異なり、それぞれの正義はどれも対等で、特権的なものは存在しない（文化相対主義）。「概念枠」が極度に異なれば、それによって組織されるリアリティ（実在）も全く異なるので、別の「概念枠」を採用する者は、全く別の異質な世界の住人で理解不可能である（概念相対主義）、といった具合である。このような相対主義の主張の中には、いくつもの論点が重

なっている。それは、真理や正しさの複数性や偶然性、「枠組み」という問題、超越的な「神の視点」の不可能性、他なるものの異質性、懐疑論やニヒリズムへの傾斜等々である。その論点の中のどれが、批判に耐えて生き残るのか、あるいは却下されるのか、またどのように変容するのかは、そもそも相対主義の主張から何を読み取ろうとするかに依存する。

相対主義の主張は自己論駁的・自滅的であるという批判はよく知られている。相対主義のある主張を考えてみると、「すべての真理はある枠組みに対して相対的である」は、相対主義自身に適用されるか、適用されないかのどちらかである。もし自己適用されるならば、この主張自体もまた絶対的に真なのではなく、相対的に真であるにすぎない。この場合、ある「枠組み」でのみ成り立つだけのローカルな真理にすぎなくなる。他方、もし自己適用されないならば、この主張自体は絶対的な真理になる。この場合、相対主義者は認めないはずの絶対的真理を認めることになってしまう。いずれにしても、相対主義は自己論駁的・自滅的である。

しかし、これは本当に自己論駁的になっているだろうか。前者の場合、ある「枠組み」でのみ成り立つ相対的な真理にすぎないと認める場合は、相対主義の徹底ではあっても、論理的な自己矛盾ではない。後者の場合、つまり相対主義の主張自体は絶対的な真理であると認める場合は、不整合であるように見えるかもしれない。確かに相対主義の主張だけを例外として、その他のすべての真理とは異なる高次のレベルへと棚上げすれば、ひとまず自己矛盾に陥ることは回避される。しかし、もし相対主義の主張自体が相対的であることが不整合であるかのように見えるとすれば、それは「真理は相対的であってはならない」ということを既に前提にしているからである。ここで注意すべきことは、相対主義はその前提をこそ認めないのである。これら二つのうちでより有益なのは、相対化を低次のレベルで止めてしまう後者ではなく、自己適用によって相対化を徹底する前者

であろう。

ただし、その方向は次のような問題を孕んでいる。相対主義を主張すること自体が枠組みに対して相対的であるならば、「相対主義を主張すること自体が枠組みに対して相対的である」という主張自体もまた枠組みに対して相対的であり、という主張もまた枠組みに相対的であり。こうして、主張すること自体の相対性はどこまでも開かれていて完結せず、また確定的・基底的な「枠組み」に達することもない。

なぜなら、そもそも相対主義において「概念枠」や「認識の枠組み」という考え方が成り立つためには、「私たちのものとは根本的に異なる別の枠組み」という考え方が成り立たなければならない。しかし、「根本的に異なる別の枠組み」が、根本的に異なるが故に私たちの枠組みにおいて理解不可能ならば、そもそもそれは「別の枠組み」としてすら認識できない。また、「根本的に異なる別の枠組み」が、私たちの枠組みにおいて理解可能ならば、違いは共通の土俵上での差異にすぎず、それは「根本的に異なる」ものにはならない。こうして、「私たちのものとは根本的に異なる別の枠組み」という考え方自体が成り立たないのだから、そもそも「概念枠」や「認識の枠組み」という考え方は成り立たないからである (Davidson 1989 : 3-15)。

このことから言えることは、「表象/実在」の二分法を前提に、前者と後者の一致度を検証するという自然主義アプローチは有効性を持たない。しかし、その一方でそこから実在を完全に消去した「表象一元論」の極端なポストモダニズム・アプローチでは、議論の妥当性や正しさを研究の実践において判断することができないということである。

では、構築主義 (反実在論) がもたらす相対主義と懐疑主義への批判を受けて、質的調査研究にはどのような方法が残されているのであろうか。それは、次の三つの視点から始まる。第一に、全体的な記述や説明の断念である。様々な理論的な構築物による社会的現実の説明は、

物象化された概念や図式の安易な援用を導き、人々の日常語による言語実践とは関係のないところで、こうした概念を外から押し付ける作業となるからである。第二に、人々の営みの「本質」を記述することの断念である。人々の「真正な経験」へと迫ろうとする努力は、認識論的な暗礁へと乗り上げる。第三に、文化相対主義を超えて、自他の相互理解や期待の共有がどのように達成されるかを「厚い」記述によって目指すこと。この三つの視点を踏まえたエスノグラフィー実践が質的アプローチの質を向上させる有効な手がかりとなると考える。

注

- 1) 本研究は科学研究費補助金 (課題番号11710174) による研究成果の一部である。
- 2) 哲学分野における訳語は「構成主義」として定着しているが、ここでは constructionism に対する訳語として「構築主義」を採用する。
- 3) 「実証主義論争」は、1961年10月のドイツ社会学会主催の研究集会で「社会科学の論理」をめぐるポパーの報告に始まり、アドルノがそれに反論し、さらにハーバーマスが「批判的理論」を、ハンス・アルバートが「批判的合理主義」の立場を継承して、8年間にわたって展開した。その集録は『ドイツ社会学会における実証主義論争』(1969)として刊行された。
- 4) 中河による「構築主義社会問題論の文献」 (<http://homepage2.nifty.com/tipitina/biblio.html>) が関連文献を網羅している。
- 5) クラパンザーノ (1980=1991) およびショスタック (1981=1994) のエスノグラフィー実践が挙げられる。

参考文献

- Burr, Vivien
1995 *An Introduction to Social Constructionism*.
田中一彦訳『社会的構築主義への招待』川島書店、1997年。
- Bogen, David and Michael Lynch
1993 “Do We Need a General Theory of Social Problems?,” In *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems*

- Theory*, edited by James A. Holstein and Gale Miller. Hawthorne, NY: Aldine de Gruyter.
- Crapanzano, Vincent
 1980 *Tuhami: Portrait of a Moroccan*, Chicago: University of Chicago Press. 大塚和夫・渡部重行訳『精霊と結婚した男—モロッコ人トゥハーミの肖像』紀伊国屋書店, 1991年。
- Clifford, James
 1988 “On Ethnographic Authority”, In *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature and Art*, Cambridge: Harvard University Press.
- Clifford, James and George Marcus
 1986 *Writing Culture: the Poetics and Politics of Ethnography*, Berkeley: University of California Press. 春日直樹ほか訳『文化を書く』紀伊国屋書店, 1996年。
- Carspecken, Phil Francis
 1996 *Critical Ethnography in Educational Research: a Theoretical and Practical Guide*, New York: Routledge.
- Denzin, Norman K. and Yvonna S. Lincoln
 2000 “Introduction” in *Handbook of Qualitative Research*, Thousand Oak, CA: Sage.
- Fabian, Johannes
 1983 *Time and the Other: How Anthropology Makes Its Object*, New York: Columbia University Press.
- Freeman, Derek
 1983 *Margaret Mead and Samoa: the Making and Unmaking of an Anthropological Myth*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press. 木村洋二訳『マーガレット・ミードとサモア』みすず書房, 1995年。
- Davidson, Donald
 1989 「概念図式という観念そのものについて」常俊宗三郎ほか訳『相対主義の可能性』産業図書。Michael Krausz and Jack W. Meiland eds. *Relativism: Cognitive and Moral*, University of Norte Dame Press, 1982.
- Geertz, Clifford
 1983 *Local knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology*, New York: Basic Books. 梶原景昭訳『ローカル・ノレッジ』岩波書店, 1999年。
- Glaser, Barney G. and Anselm L. Strauss
 1967 *Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine Publishing. 後藤隆ほか訳『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』新曜社, 1996年。
- Gubrium, Jaber F. and James A. Holstein
 1997 *The New Language of Qualitative Method*, London: Oxford University Press.
- Hanson, Norwood Russell
 1958 *Patterns of Discovery*, Cambridge: Cambridge University Press. 村上陽一郎訳『科学的発見のパターン』講談社, 1986年。
- Ibarra, Peter R. and John I. Kitsuse
 1993 「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学—論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社, 2000年。
- 中河伸俊
 1999 『社会問題の社会学—構築主義アプローチの新展開』世界思想社。
- 野家啓一
 2001 「『実証主義』の興亡—科学哲学の視点から」『理論と方法』, 16(1)。
- 太田好信
 1998 『トランスポジションの思想—文化人類学の再想像』世界思想社。
- Quine, Willard V. O.
 1953 *From a Logical Point of View*, New York: Harper & Row. 飯田隆訳『論理的視点から—論理と哲学をめぐる九章』勁草書房, 1992年。
- Rorty, Richard
 1979 *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton, NJ: Princeton University Press. 野家啓一監訳『哲学と自然の鏡』産業図書, 1993年。
- 関本照夫
 1988 「フィールドワークの認識論」伊藤幹治・

- 米山俊直編『文化人類学へのアプローチ』
ミネルヴァ書房。
- Shostak, Marjorie
1981 *Nisa: the life and words of a !Kung woman*,
Cambridge: Harvard University Press. 麻
生九美訳『ニサーカラハリの女の物語り』
リポート, 1994年。
- Spector, M. and J, I, Kitsuse
1977 *Constructing Social Problems*, Menlo Park,
CA: Cummings. 村上直之, 中河伸俊ほか
訳『社会問題の構築—ラベリング理論をこ
えて』マルジュ社, 1990年。
- 徳岡秀雄
1997 『社会病理を考える』世界思想社。
- 上野千鶴子
2001 「構築主義とは何か—あとがきに代えて」
上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書
房。
- Van Maanen, John
1988 *Tales of the Field: on Writing Ethnography*,
Chicago: University of Chicago Press. 森川
渉訳『フィールドワークの物語』現代書館,
1999年。
- Woolgar, S. and D. Pawluch
1985 Ontological Gerrymandering: The Anat-
omy of Social Problems Explanations. *So-
cial Problems* 32(3) : 214-227.